

学業達成場面における防衛的悲観主義者のポジティブおよびネガティブ感情に関する検討

荒木 友希子
(金沢大学文学部)

Key words: 防衛的悲観主義, 主観的 Well-Being, ポジティブ・ネガティブ感情

【 目的 】

元来、悲観的な思考や態度は精神的健康に対して否定的な影響を与えるものとされている。たとえば、学習性無力感に関する研究では、楽観主義が抑うつに陥る予防策として有効であり、精神的健康を促進させるという見解が得られている (Seligman, 1991)。しかし Norem & Cantor (1986) は学業達成場面において悲観的でありながら良い成績を維持する学生の存在を指摘し、悲観的思考を認知的対処方略とする防衛的悲観主義 (Defensive Pessimism: DP) の概念を提唱した。精神的健康に対して否定的な影響を与える悲観主義を真の悲観主義 (Realistic Pessimism: RP) と呼び、DP と区別した。本研究では、荒木(2005)の作成した学業達成場面の防衛的悲観主義尺度 (JDPI) を用いて学業達成場面における DP 者の主観的 Well-Being に関して検討をおこなうこととした。全回答者を JDPI の下位尺度の組み合わせによって認知的対処方略の異なるパターンに分類し、そしてそれらの認知的対処方略のパターンの違いによってポジティブおよびネガティブ感情に差があるかどうかについて検討する。

【 方法 】

調査協力者および手続き 日本人大学生 220 名を対象に調査用紙を配布した。教職課程の心理学の講義の際に、無記名方式の調査用紙を配布し、本調査研究についてのインフォームドコンセントをおこなった。調査への協力に同意した場合にはその場で回答するように依頼し、回収した。

調査内容 (1) JDPI (荒木, 2005) : 大学生を対象に学業達成場面における DP の程度を査定する。6 段階評定で、4 つの下位尺度 (悲観, 過去の成績, 肯定的熟考, 努力), 24 項目から構成されている。(2) 日本語版 SUBI (大野・吉村, 2001) : Subjective Well-Being Inventory (SUBI; Nagpal & Sell, 1985) は世界保健機構 (WHO) が開発した質問紙で、ポジティブ感情とネガティブ感情を同時に評価する点が大きな特徴である。3 段階評定で、40 項目、11 の下位尺度から構成されている。下位尺度の中には“人生に対する満足”が含まれており、主観的 well-being を構成するポジティブ感情、ネガティブ感情、人生に対する満足、の 3 要素 (Andrews & Withey, 1976) について査定することが可能である。また、日本語版 SUBI は大野ら(1996)によって標準化さ

れており、精神科患者群と非患者群を鑑別するカットオフポイントが設定されている。ポジティブ感情は 30 点以下、ネガティブ感情は 42 点以下の場合に要注意であると判定される。なお、本研究では大学生を調査の対象としたため、配偶者や子供に関する 3 項目については回答されなかった。よって、下位尺度のうち“家族との関係”尺度得点は算出しないものとした。

【 結果 と 考察 】

記入漏れのあった回答を除外し、分析の対象は 204 (男性 110, 女性 89) 名が分析の対象となった。平均年齢 19.38 歳 (SD1.09) であった。JDPI について主因子法・Promax 回転による因子分析を行った結果、複数の因子に重複して .04 以上の負荷量を示した 3 項目が認められたため、3 項目を除外して再度分析をおこなった。その結果、荒木(2005)と同じ 4 因子構造となった。

認知的対処方略のパターンの分類

全回答者に対してグループ内平均連結法によるクラスタ分析をおこなった。その際、下位尺度ごとに算出した因子得点を用いた。その結果、3 つの解釈可能なクラスタが得られた。第 1 クラスタには 66 名、第 2 クラスタには 72 名、第 3 クラスタには 66 名が含まれていた。Figure 1 に各クラスタの平均因子得点を示した。次に、得られた 4 つのクラスタを独立変数、各因子得点を従属変数とした 1 要因の分散分析をそれぞれ行った。その結果すべての因子得点において群の主効果は有意であった ($p < .01$)。そこで Tukey の HSD 法による下位検定を行った結果、悲観については第 3 > 2 > 1、過去の成績については第 1 = 3 > 2、肯定的熟考については第 1 > 3 > 2、努力については第 3 > 1 = 2 クラスタの順で有意な差があった ($p < .01$)。

これらの結果から各クラスタは以下のような特徴を持つと考えた。第 1 クラスタは、他のクラスタと比べて悲観得点が低く、過去の成功および肯定的熟考得点は高いことから DP とは対照的な位置に属する SO 群とした。第 2 クラスタは、他のクラスタと比べて過去の成功得点が低く、その他の得点も高くないことから RP 群とした。第 3 クラスタは、悲観、過去の成績および努力得点が高いことから DP 群とした。

本研究では、JDPI の下位尺度の組み合わせによって認知的対処方略の異なるパターンが 3 つ抽出された。3 つのパターンのうち、DP 群には肯定的熟考得点の

低い者が分類された。本結果は、荒木(2006)における DP 群の下位尺度得点の組み合わせと一致した。しかし、Norem(2001)による DP の定義とは一致していない。また、Hosogoshi & Kodama(2005)の日本語版 DQP では肯定的熟考に関する項目が削除されており、DP 者は否定的熟考のみおこなうとされている。本研究では、米国と異なり、日本における DP 者は否定的熟考のみを行い、肯定的熟考は行わないという結果が支持された。また、SO 群には努力得点が低い者が分類された。本研究では、DP 群の努力得点は高く、Norem(2001)と一致しているが、SO 群に関しては Norem(2001)と一致していない結果が得られた。この点に関しては今後の検討が必要である。

各クラスタにおける主観的 Well-Being の関係

Table1 に各クラスタにおける SUBI の下位尺度得点の平均値を示した。得られた 3 つのクラスタを独立変数、SUBI の各下位尺度得点を従属変数とした 1 要因の分散分析をそれぞれ行った。その結果すべての下位尺度得点において群の主効果は有意であった ($p < .01$)。下位検定の結果、ポジティブ感情得点に関しては、DP および SO 群は、RP 群に比べ、より得点が高かった。また、ネガティブ感情に関しては、SO 群は、DP 群および RP 群に比べ、より得点が高かった。また、満足得点に関しては、SO 群と DP 群はともに RP 群よりも得点が高かった。また、SO 群は DP 群よりも高かった。すなわち、DP 者は、SO 者と同じくらいポジティブ感情を感じており、RP 者と同じくらいネガティブ感情を感じていた。人生に対する満足の程度は RP 者よりも高く感じているが、SO 者よりは低かった。

本結果から、DP 者はポジティブ・ネガティブ感情ともに強く感じていることが示唆された。DP 者が精神的健康を維持するには、ポジティブ感情の強さを維持し続け、ポジティブ感情がその機能を十分に生かして日常生活や実際の課題遂行場面において良い影響を与えることが重要であると思われる。日常生活の中でストレスフルな場面に直面したとき、本来持っているネガティブ感情の強さが増強しないよう、自分のネガティブ感情を見極めてセルフコントロールをおこなうなど対処をうまくおこなうことによって、ストレスフルな場면을うまく克服することができると考えられる。

ポジティブ感情とネガティブ感情の関係

群ごとにポジティブ感情とネガティブ感情のピアソンの相関係数を算出した結果、すべての群において有意な正の相関がみられた (SO 群 $r = .145$, RP 群 $r = .610$, DP 群 $r = .364$, $p < .05$)。相関係数の有意差検定をおこなったところ、 $\chi^2(2) = 9.98$ で有意な差がみられた ($p < .01$)。そこで群間の対比較をおこなった結果、RP 群と SO 群の間で有意な差がみられた ($z = 3.21$, $p < .01$)。RP 群ではポジティブ感情とネガティブ感情の相関が強くみられたが、SO 群ではこれらの関係は RP 群ほど強くはな

かったといえる。大野ら(1996)の研究では、精神科患者群と非患者群の間でポジティブ感情とネガティブ感情の関係は異なっていたことを報告している。精神科患者群は不適応状態を呈していることを考慮すると、本研究においても RP 群では精神科患者群と同様にポジティブ感情とネガティブ感情の関係が強かったことから、RP 群は不適応状態と関係がある可能性が考えられる。一方、DP 群は RP 群ほどポジティブ感情とネガティブ感情の関係は強いものではなかった。細越・小玉(2006)は DP 者の well-being が、不適応的とされる抑うつ者ほど低くはないことを主張している。本研究とは DP の操作的定義に違いがあるが、本結果はこの主張を支持するものであるといえよう。DP に関して学生を対象に検討する研究は多くおこなわれているが、今後は、長期的にみても DP が適応的であるといえるのか、加齢の要因を加えた検討が必要であろう。

【注】本研究は平成 15,17~18 年度科学研究費補助金若手研究(B) (課題番号: 15730312) の補助を受けて行われた。(あらきゆきこ)

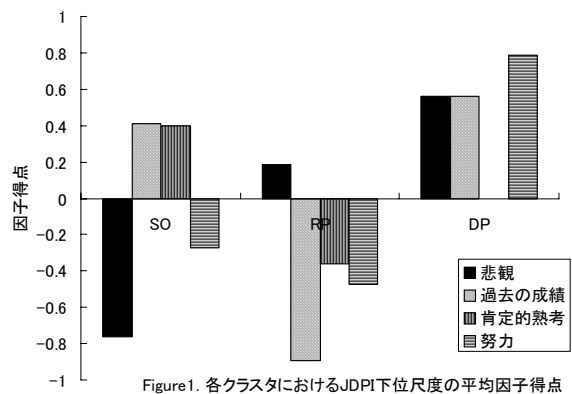


Table1. 各クラスタにおけるSUBIの下位尺度得点

下位尺度		SO群	RP群	DP群
ポジティブ感情(18項目)	M	37.71	33.58	37.68
	SD	0.63	0.60	0.63
	満足(3項目)	M	6.48	5.57
達成感(3項目)	SD	0.17	0.16	0.17
	M	6.05	5.49	6.39
自信(3項目)	SD	0.16	0.16	0.16
	M	6.05	5.10	5.68
至福感(3項目)	SD	0.16	0.15	0.16
	M	5.23	4.76	5.36
近親者の支え(3項目)	SD	0.15	0.14	0.15
	M	6.88	6.69	7.32
社会的な支え(3項目)	SD	0.18	0.18	0.18
	M	7.03	5.97	6.82
	SD	0.20	0.19	0.20
	M	46.18	40.11	41.77
ネガティブ感情(19項目)	SD	0.69	0.66	0.69
	M	15.88	13.21	13.41
精神的なコントロール感(7項目)	SD	0.38	0.36	0.38
	M	15.82	14.49	15.30
身体的不健康感(6項目)	SD	0.24	0.23	0.24
	M	6.65	5.92	6.11
社会的なつながりの不足(3項目)	SD	0.17	0.16	0.17
	M	7.83	6.50	6.95
人生に対する失望感(3項目)	SD	0.15	0.15	0.15